



撮影=岩橋仁子

タフ・ジャパン代表取締役

# 鎌田修広さん

かまた のぶひろ

昭和44年(1969年)、神奈川県生まれ。日本体育大学社会体育学科卒業、在学中にトライアスロン部を創設し初代主将を務める。平成4年、就職した紳士服チェーンでトップセールスマンとなる。消防職員となった友人の薦めで翌年、横浜市消防局へ入局。消防訓練センターの体育訓練担当教官となり、三千人を超える職員の新たな体育指導法を確立、総務省消防庁消防大学校における「消防体育訓練」講師等も担当。23年、退職し、防災研修や人材育成事業を行う㈱タフ・ジャパンを設立。代表取締役となる。著書に『生涯現役消防筋肉』(イカロス出版、平成24年6月ごろ出版予定)がある。

## モラルと絆の 防災体育で 災強の街づくりを

東日本大震災により転機を迎えた日本人の防災意識。日常の備えのために今、必要なことは何か。かつてない防災の街づくりを使命に立ち上がった消防学校の元体育教官、鎌田修広さんに聞いた。



総務省消防庁消防大学校で現在も講師を務め、消防職員にはプロとして心と体の正しいメンテナンス法を厳しく指導する。「自分のいのちを大切にこそ、人のいのちの価値がわかる。志をもった消防志を育て、日本の備えに貢献したいですね」

## 日本を もつと強く

—— 昨年の東日本大震災の直後に、防災や危機管理の研修を行う事業を立ち上げられたそうですね。

**鎌田** 十八年間勤めた横浜市消防局に退職届を出したのが、地震のちょうど四日前です。経験したことのない事態に消防行政のあり方が根底から揺さぶられる最中、現場を離れることに迷いもありました。ただ、被害の大きさを知るほど「民間の視点から地域防災を問う直す」という志を今こそ形にしなければ、と強く思うようになったんです。

消防というのは一言でいうと「究極の備え」をする仕事です。二十四時間三百六十五日、いつ、何が起きても万全に対応できる備えをとる。消防職員として、最

高水準の消防サービスを市民に提供するうえで、自分に足りないものはなんだろう」と毎日のように考え続けた十八年でした。

—— 消防はサービスだということですか。

**鎌田** はい。たとえば火災が起きた時、市民の方にはA会社とB会社どちらに頼もうかなんて選択肢はないですよ。消防以外に火消しを業務にする会社はないですから。それだけ消防の責任は重いといえますが、ともすると「何があっても消防は潰れないんだ」という間違った安心感を職員に抱かせかねません。心の油断こそが、消防のあるべき「究極の備え」にとって最大の敵です。自分は公務員だと思ふと気が緩むので、意識して消防局は「会社」、局長は「社長」と呼び変えたりもしていましたね。

——そうやって危機感を保ち続けるわけですね。

**鎌田** それは私が体育大出身で、自分で自分を追い込むのが好きな性分も影響しているのかもしれない(笑)。家庭の事情で小学五年生からアルバイトを始め、大学卒業までに五十を超える民間の仕事を経験してきた私だけに、「もし民間ならば」という意識は常に頭のどこかにありましたね。公務員意識に陥ってないかと常に自分に問い続けていたように思います。

そこへあの震災で、消防の立場を超えた住民防災の必要性を決意し、三月いっぱい退職、五月に会社を立ち上げました。社名を「フ・ジャパンとしたのは「災害に強い街づくりと人づくりを本気で考え、日本を強くする」との理念からです。

——消防の立場からの防

災には限界があると。

**鎌田** 今回の震災でも明らかなおとおり、大規模災害においては、消防の努力だけではすべての人を助けることは不可能です。消防という公助に頼るばかりで、市民一人ひとりに自分を守る自助、助け合う共助の覚悟がなければ、防災は機能しないのです。行政と市民の壁を超え、みんなが日本という一つ屋根の下で暮らす擬似家族として心をつないでいく。それは官民の経験を融合したアイデアを持ち得る、私がやるべき仕事なんだと、思い込みに近い使命感が私の原動力です。

## 道徳こそ最大の備え

——住民による住民のための防災意識をどう高めていくかが課題ですね。

**鎌田** そうした「災強」の街づくりを日本中で実現していくうえで、核となるのが「道徳」です。防災意識の高い地域は例外なく、住

民同士が強い心の絆で結ばれている。この「絆」を支えるのは、自分のいのちを大切にすると同じように、隣近所の人とのいのちも大切



防災訓練と道徳教育を融合させた教育技法「絆物語」を提案する。「住民防災の基本は絆づくり。そのお手伝いを地元・藤沢市から始めていけたら」(写真提供=著者)



に思う道徳心です。この自分の体は自分の所有物ではなく、借り物だと私は思っています。だから丁寧に扱い、最後は感謝して返さなくてならない。授かっただけのちの重みをどれだけ理解できるかで、防災に対する姿勢はまるつきり変わってきます。私の中で防災と道徳はセットなんです。

——道徳と防災は一つに考えるべきだと。

**鎌田** 私がこの結びつきに初めて気付いたのは、阪神・淡路大震災の震源地の町として知られる、淡路島の北淡町を訪ねた時でした。ここは全世帯の六割が全半壊し、三百人が生き埋めになりながら、そのほとんどが住民の協力で素早く人命救助されたことで知られています。それは町の人の間に、互いの家族構成はもちろん「誰がどの部屋で、ど

つちを向いて寝ているか」を知るほどの絆があったからと言われるのですが、「じゃあ、なぜそんな絆が結べたのか」という疑問は解消されずに、私の中でずっとくすぶっていたんです。

それを突き止めないままでは消防の仕事は終われないと思いい、昨年三月に衝動的に休みをとって現地へ車を走らせました。そこでパインと目に飛びんできたのが「道徳教育推進の町」という看板だったので。「道徳」の二文字に釘付けになり、地域の方に何うと、確かに以前からのちの尊重や助け合いの教育をととても重視しているんだと。その目を境に「道徳」は私にとって切り離せないキーワードになりました。

——防災に道徳教育をどう取り込んでいきますか。

**鎌田** これは道徳の勉強、

これは防災の学習という壁を取り払い、知らないうちにとちらも学んでいたというやり方を考えています。そのための「絆物語」という教育技法を今年は、ここ藤沢市から展開していく予定です。たとえば実際の避難生活のように住民の方に施設で一泊してもらい、異なる世代同士のグループを組み協力して課題をクリアする。そうして楽しみながら防災訓練、危機管理研修、道徳教育、生活指導、そして絆づくりができるという新たなスタイルです。

## 防災体育を全国に

——大学卒業までに五十以上の職種で働かれたそうですが、その経験は今にどう生きていますか。

**鎌田** 「信念一つで万事を

開く」という言葉に凝縮されますが、いくら知識や技術があっても、志がなければ活路は開けないということとを、働くことを通じて学びました。私は洋裁の内職をする母の助手一つで育てられ、家計を助けるため、小学校五年生からアルバイトを始めました。大学の学費はすべて自分持ちで、大学時代のピーク時は、一週間に十種類のバイトをもこなしていました(笑)。歩合制の教材販売のバイトでは、見込まれて新設の事業所の経営を任されたり、家庭教師のバイトが高じて、中学生六十人を三年間無償で預かり、体育や生活指導などをしたりと、自分でも驚くほど働くことが楽しかったですね。

——単なる収入のためだけでない何かを求めて。

**鎌田** 母の背中を見て育

った影響だと思っています。日々働けることの幸せを母は教えてくれました。洋裁が得意な母の元には、毎日のように近所の方が頼みにくるのですが、「仕事をさせていただけただけで有難い」と出されたお金の半分も母は受け取らないのです。私が貧しさから同級生にいじめられ、心が折れそうになると「人間はみな生かされて生きているんだよ。お前は力が有り余っているのだから、そのエネルギーを人様のために使いなさい」と導いてくれました。

そんな母の元で育ったので、物心ついた時から、自分の生きる意味とは何か、自分にしかできないことは何かと常に考えていました。みんなの安心と幸せに貢献できる今の仕事に感謝し、仕事を教えてくれたすべての人への恩返しに励んでいます。

きたいと思っています。——最後に三年後の目標を教えてください。

**鎌田** 一つは十八年の実務経験を生かした「消防体<sup>たい</sup>育<sup>いく</sup>教官」として、消防職員対象のタフな心と体づくりの研修を全国各県の消防学校で行うことです。一市民の目線から消防プロフェッショナルへの評価や時には苦言を伝えるのも、私の役割と思っています。

もう一つは、災害と闘<sup>たたか</sup>うタフな心と体を育てる「防災<sup>たいさい</sup>体育教官」として、地元・藤沢市を災強の街にすること。

自分の命と愛する人の命を守るための心と体と勇気を育てる「防災体育」をぜひ全国に定着させたい。震災の年に誕生した長男・強志<sup>こうし</sup>たちの世代が、未来に希望をもてるよう、今度は私が親としての背中をしっかりと見せていきたいですね。(本誌)



平成20年に結婚した看護師の美紀さんとの間に、昨年待望の長男を授かり、「強志」と名づけた。「子育て世代は防災・減災意識が高くなります。この世代が災強のまちづくりの基点になれば」